

クリ「ぼろたん」の大果・安定生産のためのせん定指標

【要約】クリ「ぼろたん」の成木前期樹（樹齢10年生前後）では、基部径が7mm以上、先端部径が4mm以上の前年結果枝を主体に結果母枝として使用し、樹冠占有面積1㎡あたり6本程度の結果母枝密度で残しせん定することで、大果を安定生産できる。

中山間農業研究所・中津川支所・果樹担当 【連絡先】0573-68-2036

【背景・ねらい】

クリ「ぼろたん」（（独）農研機構果樹研究所育成）は、大果で、食味が良く、加えて優れた渋皮剥皮性を有することから、加工業者、生産者のみならず一般消費者からも注目され、県内産地でも急速に導入が進んでいる。一方、「ぼろたん」は新品種であるため、着穂特性等不明な点が多く、円滑な普及を進める上では、雌花着性などの特性の把握と高品質な果実を安定生産するためのせん定技術の開発が必要である。そこで、「ぼろたん」の成木前期樹における結果母枝の種類、資質と雌花・着穂着生量および収量性等との関係、ならびに結果母枝密度と収量性等の関係を明らかにし、大果・安定生産のためのせん定指標を策定する。

【成果の内容・特徴】

- 1 「ぼろたん」成木前期樹の結果母枝当たりの雌花数、着穂数は、結果母枝の長さ、基部径（基部より5cm上の長径）および先端部径（先端より3芽と4芽の間の長径）と正の相関が認められる。中でも、基部径との相関が最も高く、太いほど多くなる（データ省略）。
- 2 基部径を7mm、先端部径を4mmで区分し比較すると、基部径7mm以上かつ先端部径4mm以上の結果母枝で雌花数、着穂数、収量および2L以上果数が多い（表1、図1）。
- 3 結果母枝の種類で比較すると、発育枝に比べ前年の結果枝の方が結果母枝当たりの雌花数、着穂数がやや多く、着穂率がやや高い傾向が認められる。よって、同程度の基部径であれば、前年の結果枝を結果母枝として利用する方がよい（データ省略）。
- 4 結果母枝の密度は、樹冠占有面積当たり6本とすると、4本、8本に比べ1樹当たりの総収量、2Lサイズ以上の収量が安定して多い。また、1果重が28g前後で変動が少ない（図2）。

【成果の活用・留意点】

- 1 岐阜方式低樹高栽培法（短幹変則主幹形整枝）におけるせん定時に活用する。
- 2 「ぼろたん」の樹姿は、やや直立であるため、切り戻し、誘引等を実施し、なるべく樹冠が拡大するよう留意しながら整枝する。
- 3 結果母枝として利用しない発育枝は、予備枝として先端を1/4程度切り戻しておくが良い。

【具体的データ】

表1 成木前期樹における結果母枝の区別基部径、先端部径と雌花数、着穂数および収量性、比重との関係(2008~2010)

基部径(cm)	先端部径(cm)	雌花数(個/本)	着穂数(g/本)	収量(g/本)	1果重(g)	2L以上果数(個/本)	比重
7mm以上	4mm以上	9.0 a <sup>∨</sup>	7.8 a	399 a	24.9	14.6 a	1.083
7mm以上	4mm未満	6.5 ab	5.5 ab	303 ab	25.9	10.3 ab	1.084
7mm未満	4mm以上	6.4 ab	4.8 ab	290 ab	26.0	9.8 ab	1.091
7mm未満	4mm未満	4.2 b	3.4 b	186 c	26.0	6.7 c	1.083
分散分析 <sup>z</sup>		*	*	**	ns	**	ns

<sup>z</sup> \*,\*\*は、t-検定によりそれぞれ5%、1%水準で有意差があることを示す。

<sup>∨</sup> 同一符号間には5%水準で有意差無し(Tukey-Kramer)

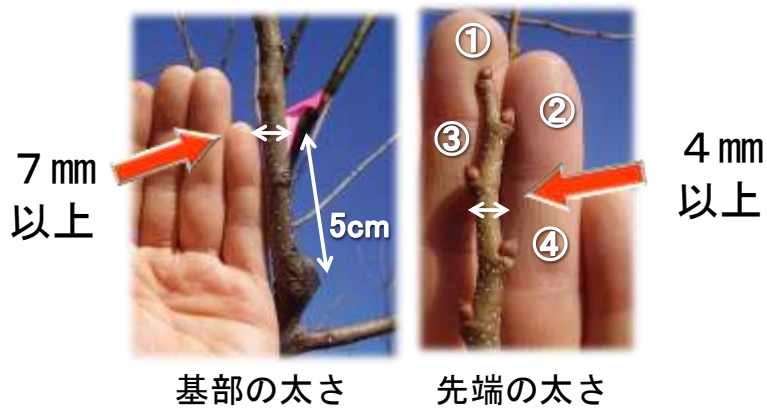


図1 結果母枝資質の指標

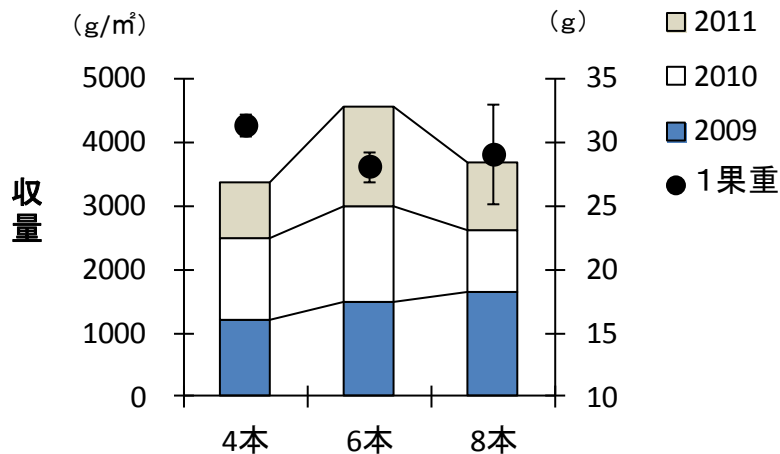


図2 結果母枝密度と収量および1果重